

<高等学校>

3 時限目 テクニカル分析

テクニカル的要因

(1) 相場を“テクニカル”に分析する意味

テクニカル的要因で相場がどう動くかを考察する前に、『テクニカル分析』によって相場を分析するのはいったいどう言う事なのか？なぜ相場動向を“テクニカル的に”分析するのかを考えてみましょう。

日々変動する相場を見ていて「どこまで相場は下がるのか？」「どこまで相場は上がるのか？」また「どこで買ったら（売ったら）いいのか？」という事を常にお考えになると思います。我々のところにもそのようなご質問が日々寄せられます。

このような時に『テクニカル分析』の手法が用いられるのです。なぜならば、『ファンダメンタルズ分析』では、経済情勢の方向性はある程度判断できるので相場の方向性もある程度判断できるのですが、その相場がどこまで到達できるのかといったところまでは判断できない(しづらい)からです。

そこで、相場の過去の動きを振り返りその特徴を分析し、現状の相場動向と過去の動向を照らし合わせれば、現状の相場がどの程度の値動きをするのかを経験則よりある程度理解する事ができるので、これが『テクニカル分析』の考え方なのです。

即ち『テクニカル分析』とは、相場の動向を測る定規みたいなものなのです。ただし、あくまでも相場の先行きの“目処”をあらかじめ認識するのであって、必ずそのとおりに相場動向が展開されるとは限りません。

また、上記の通り相場が『どのくらい変動するのか』といった“目処”の見当を付ける事のほかに、過去の動きから判断して“こういう動きをしたら、今後の相場の流れが変わるだろう”といった相場の“転換点”なども分析するのに用いられます。

現在では、様々な『テクニカル分析』の手法が開発されており、それに関する書籍や資料が多数出回っている為、マーケット参加者達は同じような『テクニカル分析』の手法を使っている可能性があります。特に初歩的（基本的）で理論的にもシンプルな分析手法は、広く一般的に使われており、その分析から来る相場のポイントは多くのマーケット参加者が意識するポイントになる事から、相場の“目処”や“転換点”となりやすい傾向にあります。

(2) 相場の“転換点”分析による要因

相場の“転換点”を探す方法としてよく用いられるのが、“トレンド分析”という方法があります。

この方法で分析できたトレンドをチャート上で見ると一本（または複数本）の傾向線、いわゆるトレンドラインが引く事ができます。上昇している線だったり、下降している線だったり、2本の線で囲まれていたりその形状は様々ですが、ひとつ言えることはこの分析で引かれたトレンドラインを相場が超えたとき、初めてそのトレンドが“転換する”事を意味すると言う事です。

この“転換点”を抜けると相場は一気に抜けた方向に加速される事が往々にしてありますが、抜けるまではグズグズする傾向にあります。この違いは、そのときの相場が持っている変動する力（ポテンシャル）にもよると思います。このポテンシャルを測るには「モメンタム分析」を用います。この方法については後述いたします。

安全志向の投資家は、この“トレンド分析”の結果で判断して、新たなトレンドが明確に発生してからマーケットに参加することが多いようです。このような手法でマーケットに参加する人たちの行動を「トレンド・フォロー」と呼ぶ事があり、おそらく参加者の大半は「トレンド・フォロー」であると言えます。

(3) 相場の目処分析による要因

新たに現れたトレンドがどこまで持続する可能性があるのかという“目処”を分析する事も“トレンド分析”に含まれています。

なぜならば、“目処”を算出するに当たりよく用いられる“フィボナッチ級数”や“一目均衡表の値幅観測論”などは、ただ単に今後の相場が動く値幅のみを計算するのではなく、これまでのトレンドの組み合わせ（上昇・下降・持合）によって次のトレンドがどの程度の力を蓄えていたかを分析する手法だからです。

この分析によって得られた“目処”はあくまでも“参考値”でしかありませんが、先にも述べたように、多くの参加者が“目処”として使っているケースが多く、トレンドの到達点として見られている為、その地点に到達する寸前では値動きが抑えられる傾向にあります。その結果往々にしてこの時点でトレンドが終了してしまう事も見られます。

上記以外で到達点の“目処”として用いられるものに、『移動平均線』があります。これはある一定期間の値動きの平均値を結んだ曲線ですが、多くの参加者による売買の平均値とみなす事ができる為、この線がひとつの売買コストの“目処”となり相場動向が抑えられたり、加速されたりします。

また、『移動平均線』には短期（数日）の平均から長期（数百日）の日数が用いられますが（日足の場合）、為替相場では短期で5日や20日、中期で45日や90日、長期で200日などが用いられる

ケースが多いようです。さらに短期線・中期線・長期線の現れ方で相場の強弱を判断する方法（グランビルの法則）があります。この判断方法の基本は、日にちの長い線を日にちの短い線が上抜け（ゴールデン・クロス）すると強気相場、下抜け（デッド・クロス）すると弱気相場とするのが基本です。

（3）モメンタム分析

相場の持っている力（ポテンシャル）を推し量るのに用いる手法で、現状の相場が買われ過ぎなのか売られ過ぎなのかを判断するのに用いられます。

相場が上昇相場に転換しそうなときでも、すでに買われすぎている相場ではさらに買い進む力は残っていないので、相場反転は失敗に終わるケースもあります。このように相場の“力”を見る事によって、今後相場が持続するエネルギーが残っているかどうかを考慮して、“転換点”前後での取引が行われます。

このモメンタム分析の手法に用いられる指標として、相対力指数（RSI）やストキャスティクス、などがあります。

これらは、ある数値以下の状態では相場が売られすぎと判断され、相場の下げ圧力が鈍ったり、ある数値より上の状態では買われすぎを意味するので、上昇力が鈍ったりします。

以上のように『テクニカル分析』では、その分析した“目処”や“転換点”に近づくとマーケット参加者の心理に大きな変化をもたらします。その結果、参加者達の心理変化が大きいほうに相場が動き始めると言えます。

相場変動のテクニカル的要因は、その分析結果による動向より生じる参加者の心理変化的要因と言い換える事ができるかもしれません。